（様式４）

# 日本ＮＧＯ連携無償資金協力　完了報告書

| １．基本情報 | |
|---|---|
| （１）案件名 | カフエ郡におけるHIV/エイズ対策事業（第２期）<br>HIV/AIDS Project in Kafue District |
| （２）贈与契約締結日および事業期間 | ・贈与契約締結日：２０１４年１月１０日<br>・事業期間：２０１４年１月１１日～２０１５年１月１０日 |
| （３）供与限度額および実績（返還額） | ・供与限度額：７６１，９７９米ドル<br>・総支出：７５２，３６５．８１米ドル<br>（返還額：９，６１３．１９米ドル、利息０円含む。） |
| （４）団体名・連絡先、事業担当者名 | （ア）団体名：特定非営利活動法人　難民を助ける会<br>（イ）電話：03-5423-4511<br>（ウ）ＦＡＸ：03-5423-4450<br>（エ）E-mail：staff@aarjapan.gr.jp<br>（オ）事業担当者名：加藤亜季子、直江篤志、山根利江 |
| （５）事業変更の有無 | 事業変更承認の有無：無 |

| ２．事業の概要と成果 | |
|---|---|
| （１）上位目標の達成度 | ムウェンベシ・クリニックにおいて、抗レトロウィルス療法（Antiretroviral Therapy: ART）センターの新設と資機材の供与により、ART 患者の受診環境を整えた。また、マウントマクル、ナンゴングウェ、ムウェンベシの３クリニックにおいて、患者台帳の改良や患者情報管理ソフトウェア（スマートケア）の活用により ART 患者情報管理システムの改善を行った。同時に、服薬支援ボランティアによる患者家庭訪問と、患者およびその親近者に対するワークショップを通じて患者の服薬遵守に対する意識を高め、継続的な通院を促した。これらの活動により、３ヵ所のクリニックを拠点に ART 患者が服薬治療を継続するための支援体制を整えた。さらに、今期よりムウェンベシ地域において、５校の学校エイズ対策クラブによる HIV 感染予防啓発活動を支援し、地域一体となってエイズの脅威を軽減させる体制づくりを行った。 |
| （２）事業内容 | **（ア）ART センターの建設と整備**<br>第１期事業で建設し、郡保健局に譲渡したマウントマクル・クリニック（以下、マウントマクル）とナンゴングウェ・クリニック（以下、ナンゴングウェ）の ART センターについては、今期も引き続き、各クリニックの管理責任者である看護師長のもとで適切に管理活用されていることを確認した。追加設備として、ナンゴングウェの ART センターには情報処理能力強化のため、患者データ登録室にコピー機１台、薬剤室に処方箋照会用の PC1 台を供与した。なお、データ登録室には当初 PC 用プリンターを設置する予定であったが、家庭訪問記録票などを複製でき、かつ PC からも出力できるコピー機に変更した。さらに、患者カルテの管理を容易にするため、書棚３架を供与した。<br>今期より支援を開始したムウェンベシ・クリニック（以下、ムウェンベシ）の ART センターは、2014 年８月 24 日に竣工し、その後診察用ベッドや机などの資機材を整備した。なお、同センターの譲渡式を 10 月に行う予定であったが、同月に発生した水難事故や現職大統領の逝去により延期となり、12 月 11 日に行った。これに先立ち、ART センターの管理に係る覚書を 12 月３日に郡保健局と締結し、譲渡式の翌日 12 月 12 日より診療が開始された。<br>**（イ）ART 患者情報管理システムの改善と確立**<br>マウントマクルとナンゴングウェでは、スマートケアへの電子登録が完了し、同システム上で患者情報を管理できるようになった。今期より支援を開始したムウェンベシでは、まず、長期来院していない患者の一覧表を作成し、次に当日の予約者の ID 番号を台帳に記載し、予約日に来院していない患者を把握できるようした。これらの情報をもとに服薬支援ボランティアが患者の家庭訪問を実施できるようになった。並行して、同クリニックにおいてもスマートケアを導入し、患者情報の電子化を進めている。<br>**（ウ）服薬支援ボランティアの育成と自立支援**<br>マウントマクルでは 10 名、ナンゴングウェでは 12 名の服薬支援ボランティアが活動を行っている。今期より支援を開始したムウェンベシでは、25 名の服薬支援ボランティアを採用した。ムウェンベシのボランティアと追加採用したマウントマクルのボランティアを対象に、①年間活動計画策定、②服薬支援と家庭訪問活動準備、③自転車維持管理、④基礎カウンセリングの各ワークショップを実施した。また、ボランティアの活動をより持続的なも |

| | |
|---|---|
| | のとするため、3クリニックのボランティアに対し、⑤組織運営力・資金調達力向上研修を実施した。さらに、3クリニックのボランティアが他クリニックを訪問し、良い点や改善点などを議論し合う相互学習会を開催した。なお、12月には活動の振り返りと、2015年の活動計画を策定するワークショップを3クリニックのボランティアに対し実施した。<br>**（エ）ART患者およびその親近者に対する啓発活動実施**<br>支援対象クリニックに通院するART患者およびその親近者に対し、HIV/エイズの基礎知識および服薬継続に関するワークショップを、マウントマクルで5回、ナンゴングウェで7回、ムウェンベシで13回の計25回実施した。前期事業においては、情報提供に偏りがちで参加者の集中力が続かないことや、一部の参加者にとり内容が高度すぎるなどの反省点から、今期ではゲームやロールプレイ、またDVDなどの視聴覚教材を導入したり、学習ポイントを簡潔にまとめるなど、参加者が効果的に学べる工夫を行った。さらに、今期より一部のワークショップでは当会現地職員に代わり各クリニックの服薬支援ボランティアがファシリテーターを務めた。これにより参加者が打ち解けた雰囲気の中で学ぶことができ、かつ参加者からの質問に対し、より地域の実情を汲み取った回答が可能となるなど、効果的な知識の伝達が可能となった。<br>**（オ）学校エイズ対策クラブに対する予防啓発活動実施**<br>当会による学校調査および郡教育局との協議を経て、ムウェンベシ地域においてムウェンベシ中高など学校、ウェストウッド小学校、ムパンバ小学校、マーノ小学校の4校を活動支援対象校として選定した。さらに、その後郡教育局からの要望と当該校の状況を考慮し、ムクユ小学校を対象校として加えた。本事業開始直後に、各学校のエイズ対策クラブが主体となって年間計画を策定した。また、各校のクラブメンバーの能力強化を目的に、①HIV/エイズ基礎知識、②リーダーシップ・ファシリテーション、③次年度の年間活動計画ワークショップを実施した。また、各校教師や地域の首長、また経験豊かな伝統的産婆を対象に④指導者研修を実施し、支援終了後も各校が独自にクラブメンバーを育成できるよう能力強化を行なった。さらに、早期妊娠が特に問題となっているムウェンベシ中高等学校では、同校生徒を対象にHIV感染予防と若年妊娠防止のためワークショップを国内NGOであるPPAZ(Planned Parenthood Association of Zambia)と協働で実施した。 |
| （３）達成された成果 | **（ア）ARTセンターの建設と整備**<br>前期に建設したマウントマクルとナンゴングウェのARTセンターでは、第1期に引き続き、各クリニックの適切な管理下で患者が診療を受けられるようになった。ムウェンベシではARTセンターを建設し、2014年12月より診療サービスが開始された。独立した診察室やカウンセリングルームを設けることで患者のプライバシーが保たれるなど、適切な環境下で診察を受けることできるようになった。<br>【成果指標①】2015年2月に同ARTセンターの使用満足度調査の結果、施設内での受診する際のプライバシー環境に関して、調査対象者の8割以上が「満足」または「非常に満足」、施設全般に関しては、調査対象者の9割以上が「満足」または「非常に満足」と回答し、目標指標の8割を上回った。<br>**（イ）ART患者情報管理システムの改善と確立** |

【成果指標】2014 年 12 月末の時点で、マウントマクルでは 918 名、ナンゴングウェでは 4,124 名の患者情報がスマートケアに入力され、両クリニックで治療中の全 ART 患者情報が電子登録された結果、予約日に来院していない ART 患者を迅速かつ容易に共有し把握できるようになった。今期より支援を開始したムウェンベシでは、当日の予約者一覧を台帳に記載し、クリニックおよび服薬支援ボランティアが予約日に来院していない患者を把握できるようになった。なお、同クリニックでは登録患者の約 65%に相当する 2,635 名がスマートケアに登録された。

**（ウ）服薬支援ボランティアの育成と自立支援**

【成果①指標①】ムウェンベシ・クリニックにて、指標の 20 名以上となる 25 名の服薬支援ボランティアを選出し、家庭訪問準備ワークショップを始め計 6 回の研修を通じて能力養成を行った。また、マウントマクル、ナンゴングウェでは各 10 名、12 名の計 22 名のボランティアに対し、資金調達能力強化ワークショップを始めする計 4 回の研修を実施した。

【成果①指標②】各クリニックの家庭訪問記録票より、2014 年 1 月から 12 月末までに、マウントマクルでは予約日に来院していない患者もしくは長期来院停止者の 36%（訪問実績 101 件。前期 119 件より 15%減）、ナンゴングウェでは同基準で 37%（訪問実績 460 件。前期 324 件より 42%増）、ムウェンベシでは同基準で 30%（訪問実績 714 件）の ART 患者に対して家庭訪問が実施されたことを確認した。

いずれも目標の 80%に到達しなかった理由として、クリニックの患者情報管理システムの構築に伴い正確な数が把握できるようになった結果、指標の分母に相当する「予約日に来院していない患者もしくは長期来院が途絶えている患者」の数が予想を大きく上回り、演算上、目標値の 80%を大きく下回ったことが挙げられる。ただし、指標の分子となる家庭訪問件数は、マウントマクルではやや減となった一方で、ナンゴングウェでは大きな伸びを示しており、全体として順調に活動が続いている。また、今期より活動を開始したムウェンベシでは、訪問件数においてマウントマクルとナンゴングウェ両数を上回る実績を残している。

ART 患者は一生涯通院する必要があり、さらに、新規に治療を開始する患者も加わるため、今後しばらくは各クリニックの ART 登録患者数は増えることが予想される。これに伴い、指標の分母となる「予約日に来院していない患者もしくは長期来院が途絶えている患者」の数は、今後短期間のうちに急激に減ることは考えにくい。従って、当初設定したパーセンテージ指標が、服薬支援ボランティアの家庭訪問活動そのものの定着度を示す値とは必ずしもいえないことが分かった。

服薬支援ボランティアは無給でクリニックに勤務しており、その多くが他の職を持ちながら従事している点、また対象地域が広く、一度に多くの患者の家庭を巡回することが困難である点などを考慮し、今後は各ボランティアが生活の負担にならない範囲で 1 ヵ月に一定数以上の患者を訪問できるよう目標を定め、地域の奉仕者として持続的に活動できる体制としたい。

なお、ナンゴングウェで 2014 年 8 月と 11 月に、家庭訪問を受けた患者の反応について調べたところ、家庭訪問を受けた患者のうち、それぞれ 60%（48 名中 29 名）、61%（52 名中 32 名）の患者が該当月中に来院しており、家庭訪問による一定の効果が確認されている。

【成果指標】2014年12月末の時点で、マウントマクルでは918名、ナンゴングウェでは4,124名の患者情報がスマートケアに入力され、両クリニックで治療中の全ART患者情報が電子登録された結果、予約日に来院していないART患者を迅速かつ容易に共有し把握できるようになった。今期より支援を開始したムウェンベシでは、当日の予約者一覧を台帳に記載し、クリニックおよび服薬支援ボランティアが予約日に来院していない患者を把握できるようになった。なお、同クリニックでは登録患者の 65%以上に相当する2,635名がスマートケアに登録された。

**（ウ）服薬支援ボランティアの育成と自立支援**

【成果①指標①】ムウェンベシ・クリニックにて、指標の20名以上となる25名の服薬支援ボランティアを選出し、家庭訪問準備ワークショップを始め計6回の研修を通じて能力養成を行った。また、マウントマクル、ナンゴングウェでは各10名、12名の計22名のボランティアに対し、資金調達能力強化ワークショップを始めする計4回の研修を実施した。

【成果①指標②】各クリニックの家庭訪問記録票より、2014年1月から12月末までに、マウントマクルでは予約日に来院していない患者もしくは長期来院停止者の36%（訪問実績101件。前期119件より15%減）、ナンゴングウェでは同基準で37%（訪問実績460件。前期324件より42%増）、ムウェンベシでは同基準で30%（訪問実績714件）のART患者に対して家庭訪問が実施されたことを確認した。

いずれも目標の80%に到達しなかった理由として、クリニックの患者情報管理システムの構築に伴い正確な数が把握できるようになった結果、指標の分母に相当する「予約日に来院していない患者もしくは長期来院が途絶えている患者」の数が予想を大きく上回り、演算上、目標値の80%を大きく下回ったことが挙げられる。ただし、指標の分子となる家庭訪問件数は、マウントマクルではやや減となった一方で、ナンゴングウェでは大きな伸びを示しており、全体として順調に活動が続いている。また、今期より活動を開始したムウェンベシでは、訪問件数においてマウントマクルとナンゴングウェ両数を上回る実績を残している。

ART患者は一生涯通院する必要があり、さらに、新規に治療を開始する患者も加わるため、今後しばらくは各クリニックのART登録患者数は増えることが予想される。これに伴い、指標の分母となる「予約日に来院していない患者もしくは長期来院が途絶えている患者」の数は、今後短期間のうちに急激に減ることは考えにくい。従って、当初設定したパーセンテージ指標が、服薬支援ボランティアの家庭訪問活動そのものの定着度を示す値とは必ずしもいえないことが分かった。

服薬支援ボランティアは無給でクリニックに勤務しており、その多くが他の職を持ちながら従事している点、また対象地域が広く、一度に多くの患者の家庭を巡回することが困難である点などを考慮し、今後は各ボランティアが生活の負担にならない範囲で1ヵ月に一定数以上の患者を訪問できるよう目標を定め、地域の奉仕者として持続的に活動できる体制としたい。

なお、ナンゴングウェで2014年8月と11月に、家庭訪問を受けた患者の反応について調べたところ、家庭訪問を受けた患者のうち、それぞれ60%（48名中29名）、61%（52名中32名）の患者が該当月中に来院しており、家庭訪問による一定の効果が確認されている。

| | |
|---|---|
| | 【成果②】当会の事業終了後も活動が継続される体制づくりのため、服薬支援ボランティアに対し、組織運営力向上および資金調達能力強化研修を実施した。同研修では、ボランティアが帳簿、年間収支計画、自身の強み弱み、外部環境分析を踏まえたビジネスプラン作りについての知識を習得した。なお、本成果は当初第３期に示すことを予定していたが、早期の習得と実践が必要と判断し、今期より成果を出す取り組みを行っている。<br>【成果②指標】ナンゴングウェのボランティアはすでに研修で得た知識を活かし、自発的にボランティアが資金調達イベントを開催したり、ケータリング事業を行っている。またマウントマクルのボランティアは、クリニック内で傘の販売を開始し、そこから得られた利益を元に今後はお菓子や日用品などの販売を計画している。<br>**（エ）ART 患者およびその親近者に対する啓発活動実施**<br>【成果指標①】患者およびその親近者を対象とする服薬順守ワークショップを、計 25 回（マウントマクル５回、ナンゴングウェ７回、ムウェンベシ 13 回）開催、計 913 名が受講し、指標を達成した。<br>【成果指標②】ワークショップ実施後の知識確認テストで、調査対象受講者の９割以上が 60 点以上を獲得し、指標を達成した。<br>**（オ）学校エイズ対策クラブに対する予防啓発活動実施**<br>ムウェンベシ地域の小学校４校、中高等学校１校の計５校のエイズ対策クラブメンバーに対し、HIV/エイズ基礎知識研修など、計 15 回のワークショップを実施した。また、各校のクラブは、世界エイズデーを始めとする啓発記念日などを利用し、自校の生徒や地域住民を対象に、歌と踊りや寸劇、また啓発ビデオの上映などを交えたHIV感染予防啓発イベントを計５回実施した。<br>【成果指標①】ワークショップ実施後の知識確認テストで 80 点以上を記録したエイズ対策クラブメンバーは６割にとどまり、指標の７割に到達しなかった。第３期事業ではクラブメンバーの定例会の中で確認テストを行うなどして、知識の定着に努める。 |
| （４）持続発展性 | ナンゴングウェの ART センターは、当会が新センターを建設したことにより、政府から「設置型 ART センター」としての認定を受けた。これにより今後、医学博士の学位を持つ医師の配置対象となったり、ARV 薬の直接発注が可能となるなど、今後より充実した医療サービスの提供が期待できる。<br>患者情報管理システムに関し、マウントマクルおよびナンゴングウェにおいて、全 ART 患者の電子登録が完了した。これにより、ART 患者の情報を迅速かつ容易に照会できるようになった。今後はクリニック職員により情報管理を行うことができる見込みである。また、服薬支援ボランティアにとり家庭訪問対象者の把握が容易となり、活動を効率的に実施できるようになる。<br>マウントマクルおよびナンゴングウェの服薬支援ボランティアは前期に引き続き、また今期より支援を開始したムウェンベシの服薬支援ボランティアは、家庭訪問活動だけではなく、カルテ整理や来院患者の身長や体重、血圧測定など、クリニックの補佐業務を行う役割が定着している。ボランティア間で曜日ごとのシフトを組み、活動が個人の生活リズムに組み込まれ、過度な負担なく活動が継続できている。また、マウントマクルおよびナンゴングウェの服薬支援ボランティアは、今後の活動資金を確保するため、組織運 |

| | |
|---|---|
| | 営力向上および資金調達能力強化研修で得た知識も活用して、すでに資金調達活動を開始しており、服薬支援活動持続のための財政基盤を整える取り組みがなされている。<br>患者およびその親近者に対するワークショップでは、今期より一部のワークショップにて当会現地職員に代わり各クリニックの服薬支援ボランティアがファシリテーターを務めるなど積極的な関与が見られた。これは、服薬支援ボランティアが将来自主的に患者を含む地域の人びとに対し啓発活動を実施する能力の向上につながっている。<br>学校エイズ対策クラブでは、研修を通じて得た知識や技術を活かして地域や学校内で啓発活動を実施するなど、活発な活動が確認された。また、クラブの定例会に関しては、当会職員の監督がなくとも、クラブメンバー自身、もしくは顧問教師が進行役を務め、定期的に会合を行うことができている。さらに、服薬支援ボランティアと共同で啓発活動を実施するなど、地域を巻き込んだ活動が確認された。服薬支援ボランティアとの関係を築くことにより、地域の中で協力し合い、啓発活動を継続して実施しやすい環境を整えることができた。 |

| ３．事業管理体制、その他 | |
|---|---|
| （１）特記事項 | 特になし。 |

完了報告書記載日：２０１５年４月１０日
団体代表者名：特定非営利活動法人　難民を助ける会
理事長　長（志邨）　有紀枝（印）

【別添書類】
① 日本ＮＧＯ連携無償資金収支表（様式４－a）
② 日本ＮＧＯ連携無償資金使用明細書（様式４－b）
③ 【添付資料 1】事業内容、事業の成果に関する写真
④ 【添付資料 2】活動詳細一覧表
⑤ 外部監査報告書（後日提出）